

気象防災の知識普及への取り組みと課題

藤井 聡 (日本気象予報士会)

1. はじめに

昨年度より日本気象予報士会は気象庁との連携により局地的大雨による災害について防災講演が地域住民に対し始められた。局地的大雨の際、生命を守るためには住民自身の適切な行動と判断が必要となるが、自ら取得した防災情報を読んでどう判断し行動したらよいのか求められる。しかし、防災情報の見方や判断について住民にあまり理解されていない内容もあり、繰り返し伝えていく必要があると思われる。

2. 過去の災害事例

地域住民がよく覚えている局地的大雨の事例を扱って、過去に起きた現象と災害を想起しやすいよう、講座をすすめるのが最も望ましいと考える。しかし、近辺の都道府県の事例も参考となろう。局地的大雨の事例として、

- ① 杉並豪雨 (東京都) 2005. 9. 4
- ② 池袋の豪雨 (東京都) 2008. 8. 5
- ③ 板橋豪雨 (東京都) 2010. 7. 5
- ④ 玄倉川水難事故 (神奈川県) 1999. 8. 14
- ⑤ 佐用町の豪雨 (兵庫県) 2009. 8. 8

いわゆる短時間大雨ではないが、台風や前線により広域を襲った豪雨で局地的な水害をもたらした例も参考になる。その事例として、

- ⑥ 「平成20年8月豪雨」(愛知県) 2008. 8. 29
- ⑦ 「平成21年7月中国・九州北部豪雨」
(山口県) 2009. 7. 21
- ⑧ 台風9号による豪雨(静岡県) 2010. 9. 8
- ⑨ 「平成23年7月新潟・福島豪雨」
(新潟県・福島県) 2011. 7. 30

しかし、10年以上前のことになると忘れ去られている場合が多く、例えば、静岡県では「七夕豪雨」(1974)は知っていても、狩野川台風(1958)による水害を知っている人はもう少なくなっている。東京都民でも「東京湾台風」(1917)により下町が大きな高潮災害(都内の死者行方不明562名)を蒙った話は忘れ去られている。

3. 「お天気教室」等での取り組みを生かす

予報士が講師となって各地で「お天気教室」等が行われているが、座学だけではなく、理解してもらえるような工夫をして講座を開くのも方法である。これまで「お天気教室」等で以下のような内容を含めて取り組んだが、防災講座にも生かしたい。

① DIG形式による避難経路づくり

東京都を襲った過去の水害事例を画像で知った中高生が、多摩川のハザードマップを基に学校 → 駅まで帰宅

経路をグループで話し合いながら考え発表した。

② クイズを用いて豪雨時における行動の選択

「雨が急にひどくなってきたので、田畑や川の様子が機になり、見に出かけた」(Yes No)等のようなクイズを出して行動方法を選択するなど、参加形式にしてみた。親子で参加している講座もあったので、親子で考えながら答えて理解につながった。

ほか、パソコンや携帯電話での気象情報収集(サイトの紹介)の方法を教え実際につないで閲覧させたり、簡単に天気図を描かせたりして理解しやすくした。

4. 課題

① レーダーアメダスの読み方の理解に向けて

情報を収集できるようになったが、画面に出てきた雨雲がそのような雨を降らせるのか理解できない人も多いので、雨雲と雷雲のちがいや、ナウキャストの操作方法を理解できるようにしなくてはならない。実際のエコー画像や雲や雨の実際の写真を使いながら雨雲の動きや天気変化がどうなるのかを考えることができるようにした。

② 落雷事故にも言及

人体への落雷については実験や事例を通して研究が進められているが(北川, 1992 など)、落雷についてクイズ形式で行ってみると、まだ知られていないことが多いことに気づく。

「急に夕立になり雷が激しくなってきたので、広い野原、海岸を急いで走って帰ろうとした」という設問にはNoと回答する人が多いが、「急に夕立になり、雷がひどくなったので、木の下で雨宿りをした」「雷は電気なので、絶縁体であるゴム靴やビニールのレインコートを身につけて外に出れば大丈夫である」という設問には意外とYesとする解答する人がいる。木の下で雨宿りをされていて気に落ちた雷の側撃を受けて死亡する例は後を絶たないが、実際の事故例や実験例を伝えながら、正しい行動を伝えるようにした。

③ 気象警報、注意報が出たら・・・

警報が発表される基準や各種指数の意味を理解させることも必要ではあるが、警報が発表されたとき、どのような災害の可能性があるのか(例えば「浸水害」の意味など)、どのような場所でどんな災害が起こる可能性があり、どう行動したらよいのか等がそれ以上に重要に思う。このようなとき、情報の集め方や行動方法、周囲の様子で気を配ることなど、具体的な例示が必要に思う。